田山花袋記念文学館

Tayama Katai Literature Museum

利用のご案内

◆開館時間　午前９時～午後５時
（入館は午後４時３０分まで）

◆休 館 日　月曜日（休日を除く）
休日の翌日
（土曜日・日曜日・休日を除く）
年末年始

◆入 館 料

	個 人	団体（20人以上）
一　般 （中学生以下を除く）	220円	110円

※小・中学生は無料です。
※毎月第一日曜日（家庭の日）、５月13日（花袋忌）、
10月28日（群馬県民の日）は無料です。

田山花袋記念文学館/〒374-0018 館林市城町1番3号
TEL/FAX 0276-74-5100
館林市教育委員会文化振興課/〒374-0018 館林市城町3番1号
TEL 0276-74-4111 FAX 0276-74-4113
http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/

「田山花袋旧居」もあわせてご覧ください。
（道路北側・第二資料館前）

施設のご案内

交通案内

東武伊勢崎線館林駅下車　徒歩20分

ふるさと

館林と田山花袋

田山花袋は、明治４年12月13日館林に生まれた。本名録弥（ろくや）。田山家は、旧館林藩主秋元家に仕え、江戸時代に山形より館林に移り住んだ。

花袋は一家して上京する明治19年まで館林で過ごした。館林東学校に学ぶかたわら、旧館林藩儒者吉田陋軒（ろうけん）に漢学を学び、この頃より漢詩文を雑誌に投稿するなど、文学に目覚めていく。

花袋は上京後、このふるさとでの生活を『ふる郷』『小さな鳩』「幼き頃のスケッチ」などに描いた。



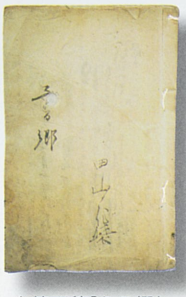
少年時代の花袋（右端）



初版『ふる郷』



漢詩集『城沼四時雑詠』



自筆原稿「ふる郷」

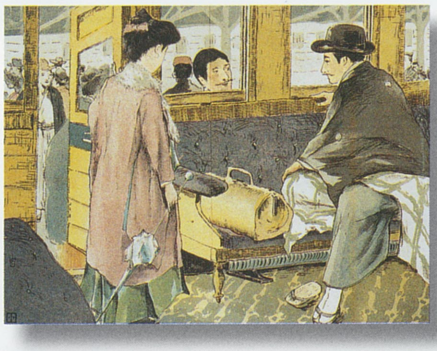
私の大きくなった町は平野の中の
摺鉢（すりばち）の底のような処にあった。
……（中略）
冬は赤城おろしが吹荒（ふきすさ）んで
日光連山の晴雪が
寒く街頭に光って見えた。

「幼き頃のスケッチ」より

文学者花袋

田山花袋と文学

上京した花袋は、明治24年、尾崎紅葉を訪れ、小説家を志す。英語を学びながら西欧文学に触れた花袋は新しい文学を試み、明治40年「蒲団（ふとん）」の発表により、日本の自然主義の確立者として、近代文学界に大きな足跡を残した。続いて「生」「妻」「縁」の三部作や、『田舎教師』を発表。晩年には歴史小説や心境小説に取りくみ、その一生を文学ひとすじに歩んだ。



「蒲団」口絵　小林鍾吉画　（明治40年９月「新小説」）



初版『田舎教師』



『田舎教師』口絵原画（岡田三郎助画）



花袋書簡
（岡田美知代宛）
「蒲団」発表後、そのモデルである岡田美知代への詫びを記す。



初版『妻』



初版『東京の三十年』



初版『百夜（ももよ）』

田山花袋略歴

明治	4(1871)	12月13日、田山錦十郎・てつの次男として生まれる。
	10(1877)	5歳　父錦十郎西南戦争にて戦死。館林東学校に入学。
	16(1883)	11歳　この頃から吉田陋軒に漢学を学びはじめる。
	19(1886)	14歳　一家して上京。
	22(1889)	17歳　この頃、松浦辰男に和歌を学ぶ。
	24(1891)	19歳　尾崎紅葉を訪ねる。小説「瓜畑」を発表。
	27(1894)	22歳　和歌を「文学界」に投稿。
	29(1896)	24歳　この頃、島崎藤村・国木田独歩に出会う。
	32(1899)	27歳　太田玉茗の妹りさと結婚。博文館に入社。
	35(1902)	30歳　『重右衛門の最後』を発表。
	37(1904)	32歳　日露戦争第二軍写真班員として従軍。
	40(1907)	35歳　「蒲団」を発表し、自然主義文学の代表となる。
	41(1908)	36歳　「生」「妻」を発表。
	42(1909)	37歳　『田舎教師』を発表。
	43(1910)	38歳　「縁」を発表。
大正	元(1912)	40歳　博文館を退社。
	5(1916)	44歳　『時は過ぎゆく』を発表。
	6(1917)	45歳　「一兵卒の銃殺」『東京の三十年』を発表。
	13(1924)	52歳　『源義朝』を発表。
昭和	5(1930)	58歳　5月13日没、東京多磨墓地に葬られる。

（年齢は、明治5年暦法改正を考慮し満年齢で換算）

常設展示室



文学者花袋

復元された書斎

